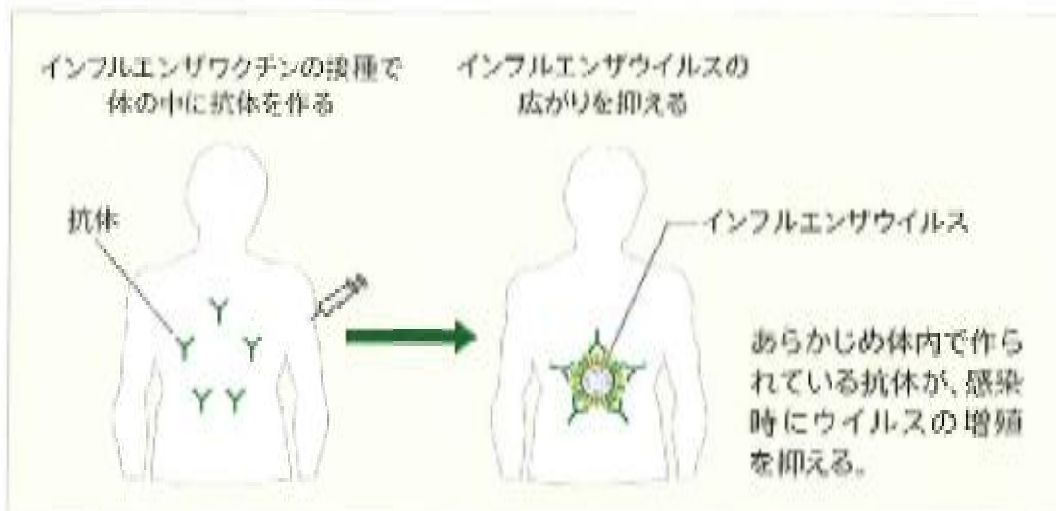




「インフルエンザのワクチン」について

そもそもワクチンとは？

人間の体は、一度ウイルスに感染すると体の中にそのウイルスに対する「抗体」を作り、もう一度ウイルスが入ってきた時に感染を防ごうとする働き（免疫）があります。ワクチンは予防接種によってあらかじめ抗体を作り、感染を抑えようとするものです。



ワクチンには「不活化ワクチン」「生ワクチン」と大きく2つの種類があります。

「不活化ワクチン」とは、ウイルスに科学的な処理を加えて感染性をなくしたもので、私たちのからだは抗体を作るもとになるたんぱく質だけから成り立っています。

インフルエンザワクチンはこの不活化ワクチンです。一方「生ワクチン」とは毒性を弱めた生きたウイルスをもとに作られたものを言います。

「新型」というけれど、「型」とってどういうこと？

ウイルスにはもともとA型、B型、C型と種類があります。A～Cまでの3つの型しかないのであれば、理論上は3回ワクチンを接種すれば心配はないということになります。

しかしウイルスの表面にあるトゲ状の部分が毎年少しずつ変化するため、毎年多くの方が発症してしまうのです。今までブタや鳥にしか感染しなかったウイルスが人に感染してしまうのもこういったことからなのです。こういった「変化する」ということがあるため、致し方なくワクチンはインフルエンザの型を予想して作られます。インフルエンザワクチンはA型2種、B型2種の混合により作られています。つまり4種混合となります。従来は3種混合でしたが、ここに来て4種に増えています。A型2種のうちの片方が新型インフルエンザにも効果があるとされています。